

---

# HANGMAN

彪峰イツカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H A N G M A N

### 【Nコード】

N 9 2 6 0 Z

### 【作者名】

彪峰イツカ

### 【あらすじ】

「首つりの城」に住まう風変わりな伯爵、ゼロ・ハンゲマン。彼とその城に仕えるメイド、アリスが目にする、かなしくて少し残酷な物語。

近世西洋ゴシック・ホラー連作短編集。

オリジナル創作サイト「Never-never Land」より転載

## エンジェル・ステイグマータ

新聞ががさと音を立てる。その粗悪な紙ならではのかさついたノイズにまぎれるように、短い声がこぼれ落ちた。

「アリス」

「はい」

返事をしたのは、ひとりの若いメイドだった。カールした金髪を左右の側頭部で結んでいる。彼女の若き主人はソファと新聞に埋もれたまま、小さな声で問い掛けた。

「お茶をいれてくれませんか？」

「はい、すでに準備してあります。でも……」

アリスは主人には見えないと知りながら、にっこりと微笑んだ。

「新聞をお片付けにならないければ、お茶の用意ができませんわ」

「……面白い記事があるので、ぜひお茶を飲みながら読みたいのです。お茶がないと頭が回りません」

「でも」

アリスはやんわりと、しかしきつぱりと反論した。

「そんなお行儀の悪いところ、リデルさんに見つかったら大変ですわよ？」

「……わかりました。片付けます」

主人はしぶしぶといったように新聞を脇にどけた。ようやくアリスの前に姿を現したその男は、目も髪も真っ黒で、着崩れたスーツも黒。やせぎすで生氣もなく、どこことなく不吉な印象を与える青年だった。

「アリスは有能ですが、なかなか厳しいですね」

無表情な顔に無機質な声。彼こそがアリスの仕える主人、ゼロ・ハングマン伯爵なのだった。

x x x

アリス・ウェーバーがハングマン城 通称「首つりの城」に仕えるようになったのは、ごく最近のことだ。主人のゼロ・ハングマンと執事のみが暮らす、ロンドン近郊にありながら不気味で小さな孤城。新聞にメイドの募集が出てもほとんど応募するものはないらしく、アリスが申し込むとすぐに採用された。彼女自身はといえば、ただ高額な報酬に惹かれたただけだった。付きまとう不穏な噂など、どうでもいい。天涯孤独のアリスはひとりで生きていかなばならぬいし、生きていくには何かと金がいるのだ。

実際に城に入ってみると、街で聞いた噂のほとんどがすぐに嘘だと分かった。伯爵は棺桶で眠ってなどいなかったし、ワインの代わりに血を飲むこともない。執事も不気味な大男などではなく、長身で綺麗な顔をした、若い男だった。城は彼が超人的な働きできりもりしていて、決して荒れ果ててはいない。一体誰が「首つりの城」などと言いついたのか……アリスにはわからなかった。

主人のゼロは二十代後半で、物静かな男だ。伯爵というにはやや貧弱過ぎるような気もするが、顔立ちはそう悪くない。執事のリデルには頭が上がらず、アリスにもそれなりに優しい。

リデルもまた紳士的な男だった。ゼロよりは年上だが、正確な年齢は良く分からない。柔らかな物腰で、ゼロとは似ていないがどこか兄弟のようにも見える。無精で気ままな主人を、優しく厳しく指導していて、たぶんこの城の実質的な主はリデルだろう。この若過ぎる執事が一体いつからゼロの側にいるのか、アリスは良く知らない。メイドに過ぎない彼女には、知る必要もないことだ。彼女はそう割り切っている。

アリスのいれたお茶を美味しそうに飲んでいるゼロ。しかし彼はちらりちらりと新聞の方を気にしているようだった。アリスがくす

りと笑うと、ゼロはやや眉を寄せて彼女を見上げた。

「何です？」

「いえ……」

アリスは笑みを引つ込めた。

「何だか、すぐくお気になさっているんだなつて」

「気になりますよ。アリスも見てごらんなさい」

促され、アリスは新聞を手を取った。何面か　と聞く必要もなかった。一面をでかでかと飾る文字に、目が吸い寄せられる。

「『裁きの天使』……？」

「面白いです。とても面白い」

ゼロは赤みがかった水面を見つめながら、淡々とつぶやいた。

アリスはざつと紙面に目を通した。　「裁きの天使」。それは、現在ロンドンを騒がせている殺人鬼につけられた異名らしい。悪趣味な名前だ、とアリスは眉を寄せた。

「面白いのは、『天使』がさほど非難されていない点なのですよ」  
アリスはゼロを見遣った。主人はソファの上に丸くなって座っていた。まるで黒猫のようだと思う。

「ふつつ、殺人事件であれば被害者が悼まれて、加害者は憎まれる。そういうものでしょう？」

「もちろんです」

「しかし、この事件はその経過を辿っていません」

「え……？」

アリスは驚いて聴き返すと、ゼロは彼女を見上げた。真つ黒な空洞が、まるで夜闇のように彼女を映し込んでいる。

「被害者はどうやら後ろ暗いものたちばかりのようなのです。先日勝手な理由で労働者数百人をいつせいに解雇した工場長とか、貧困層から少女を買い上げて売春宿を営んでいた女とか、植民地から連れてきた奴隷をひどく虐待していた貴族とか。……どうです、アリスは彼らを悼むことができますか？」

「そりゃ、私もそういうひとたちって好きにはなれませんが」

アリスはゼロをじっと見つめ返す。

「だからって殺していいかって言われると……」

「難しい問題ではありますね。罪は裁かれるべきものなのだとすれば、一体誰がそれを裁くのか」

ゼロはリデルの焼いたクツキーを一枚取り上げ、唇の間に挟みこんだ。そのまま、くぐもった声で続ける。

「私は無神論者なので、神が罪を裁くとは思いません。まあ、信じるのは自由ですし、信仰によって精神に生じる救いについてまで否定する気はありませんけれど」

「はあ……」

「たとえ被害者が何か罪を犯していたとしても、加害者の罪は罪として存在するわけですよ。ではその罪は一体誰が裁くのでしょうか？」

「私には難しいお話はわかりませんが」

アリスは小首を傾げる。

「とりあえず、この犯人は人間ですよ」

「天使なんて代物がいるのなら、私は見てみたいです。特に羽の辺りの構造が。どの骨から生えているのでしょうか……」

ゼロはクツキーを頬張りながらうつとりと天井を見上げた。

「人間の骨って美しいんですよ、アリス。いえ、骨だけではありません。生き物の体というものは実に美しい。私は何度か死体を解剖したことがあります、本当に素晴らしいものでした」

「……………」

アリスは当惑して主人を見つめる。いつもと変わらない様子のゼ

ロ　だが、ロにしている内容は少し、気味が悪い。

「ダ・ヴィンチが人体解剖に手を染めたのも、私には良く判りますよ。私たちはいつだって自分を知りたいと思っているものです。……」

「……ただし」

ゼロはくるりとアリスの方を見遣った。

「死んでいるものより生きているものの方がずっと美しい。ですから 私は殺人が嫌いです」

「……………」

アリスが言葉を失っていると、階下から物音が聞こえてきた。リデルが帰ってきたのだろう。静かに階段を上ってくる足音が響き、やがて扉が開く。アリスはほっと安堵の吐息を漏らす、それも一瞬のことだった。

「ゼロ様」

ゼロはぎょろりとした目でリデルを見た。扉からその長身を覗かせているリデルは、穏やかな微笑を浮かべている。くすんだグレイの髪、翡翠色の眼差し、薄い唇。それが、剣呑な言葉を紡いだ。「街で死体を拾ってきました。如何なさいますか」

「は…………？」

思わず声を漏らすアリスには構わず、ゼロは常にない身軽さでひよいとソファから飛び降りた。

「警察には話をつけてあるのか？」

「ええ。おそらくは『天使』の手によるものだろうとのことですよ」

今度は教会から破門されたばかりの元修道女だとか

「ふうん。今度はどんな『罪』があつたのかな」

ゼロはつぶやいてから、ふとアリスに気付いたようにその暗い視線を向けた。

「アリスも、見ますか？」

「み、みるって…………何を」

「解剖、ですけど」

「け、結構です！」

アリスは悲鳴のような声をあげて部屋を飛び出す。恐ろしかった。ただただ、怖くてたまらなかった。

「首つりの城」には死体が集まる…………その噂は本当だったのだ！

× × ×

あてがわれた部屋まで駆け戻り、ベッドにうつぶせる。ふわふわとした、やわらかなベッド。使用人に使わせるようなものではないということは、アリスにもわかっていた。部屋も小ぎれいでそれなりの広さもある。ここをあてがってくれたのはゼロとリデル。彼らは決して悪人ではない。

「でも……かいぼう、なんて」

ぞつとした。死体を切り刻む行為。それは罪だ、と直感する。そんなこと、神がお許しになるはずがない。彼らは医者ですらないのだから……。

「死んでいるものより生きているものの方がずっと美しい。  
ですから 私は殺人が嫌いです」

それはゼロの言葉だった。その意味は良くわからなかったが、しかしそれ自身では嫌な感じはしない。彼は死体を暴く。だからといって自分で死体を作り出したとは思わないのだ。むしろ、その死体がどうして命を落としてしまったのかを知りたいと思っているのかもしれない。美しかるべき命が、どこにどうして零れ落ちてしまったのか……。

しばらくそのままじっとしていたアリスだが、やがて体を起こした。

「ああ、夕飯の支度しないと」

鏡台を覗き、乱れた髪をなでつける。自分はこの城のメイドなのだ。仕事はきちんとしなければ。

ベッドから立ち上がったとき、部屋の扉がノックされた。

「アリス？ いますか？」



ゼロの声だ　気付いた瞬間、何故か彼女の動悸が瞬間的に早くなる。

「い、いますけど」

「……………」

ドアを挟んでの沈黙。アリスはやがて耐え切れなくなり、再び口を開いた。

「あの……ゼロ様ですよ？　どうかなさいましたか？」

「……ドア、開けていいですか？」

「え、ええ」

そして姿をみせた彼女の主人は、何故か不思議なほど気落ちしているようだった。

「ゼロ様？」

「できれば……その……」

視線を彷徨わせながら、ぽつりぽつりとつぶやく。

「辞めないで欲しいのです……。貴方は本当に有能なメイドですし

……リデルも、貴方のことを気に入っていますから……」

「は？」

「その、私の趣味について、貴方が気味悪く思うのはわかります。これからは貴方の前ではそういう話はしないようにしますし、今日も血の匂いがしないようちゃんとシャワーを浴びてきました。リデルに髪まで洗われたんですよ」

「はあ……」

「ですから、その……貴方の入れてくれるお茶、美味しいですし……」

「……」

「あの、辞めるつもりはありませんけれど」

「え？」

今度はゼロが聴き返す番だった。アリスはくすくすと笑う。

「確かにさっきは驚きました。でも」

ゼロの上背はアリスより少し大きい。見上げると、かすかに石鹼の匂いが漂ってきた。

「私はこのお城のメイドですから、ちゃんと務めはこなします」  
「そう……ですか」

ゼロはほっとしたように吐息をつく。

「あと、その……解剖、のことですけど」

「はい」

「何かわかったんですか？」

「……気持ち悪くないんですか？」

ゼロの問いに、アリスは困ったように首を傾げた。

「自分の目で見るのは怖いですけど……、でもお話くらいなら」

「そうですか」

ゼロはつぶやき、そしてアリスを真っ直ぐに見つめた。

「では、私のことは　気持ち悪いですか？」

「……………」

アリスは一瞬驚いたように目を見開いて、やがて首を横に振った。

「いいえ」

「……そうですか」

ほっとしたようにかすかに微笑するゼロ。それはアリスが初めて見た、少し悲しげな笑みだった。

x x x

そのまま、ゼロはアリスの部屋の床に座り込んだ。長く伸びている黒い前髪を指先でひねるようにしながら、ぽつぽつと話し始める。

「あの修道女、どうやら妊娠が発覚して破門されたようです」

「え？　妊娠？」

十代後半のアリスには少々気まずい話だった。ゼロはそれがわかっているのかいないのか、淡々と話を続ける。

「ですから、街での反応も比較的冷たいものであったと　神に仕

えるべき存在が穢れたのだから、『天使』に裁かれても仕方がない、  
というような」

「そんな……！」

口をとがらせるアリスに、ゼロは視線を向けた。

「百歩譲って修道女の罪を認めたとしましょう。しかし彼女の胎内に  
息づいていた命には何の罪もありません。そして彼女が咎められ  
るのならば、彼女を孕ませた男も同じように咎められるべきでしょ  
う。私はそう思います」

「……そうですね」

アリスはつぶやく。この事件、何かがおかしい。この「天使」と  
いう名の犯人　気味が悪い。

「リデルに調べてもらったんですが、どれも殺しの手口は似通って  
いるようです。お腹の大きな血管を細い刃物で貫いている……まあ、  
どれも失血死ですね」

「失血死……」

「あと、もうひとつ興味深いことがあります」

アリスはすんと、とゼロの目の前に座りこんだ。再び、石鹸の匂  
いが鼻腔をくすぐる……。

「最初の工場長は心臓が悪かった。その心臓が、抉り取られていた」  
「えぐ……？」

「娼館の女は腰が曲がっていた。すると背骨がまるつきり抜き取ら  
れていた」

アリスは口元を押さえる。

「今回は彼女の子宮がなくなっていました。胎児ごと」

「な、何のためにそんな……？」

「さあ？　『悪いところを切り取って持って行ってくれる、さすが  
「天使」だ』というような声もあるようです」

「そんな馬鹿な！」

「ええ。私もそう思います」

ゼロは立てた膝の間に顎を埋めた。

「しかし、この犯人はそういう反応を全て予想して犯行に及んでいる　そんな気がしますね」

「つまり、そうしておけば自分の犯行が見逃される、深く追求されない、そう思っている……？」

「そういうことです。アリスは賢い子ですね」

「淡々と言われ、アリスはやや困惑した。」

「多分、相手は誰でもいいんです。殺しても、恨まれない相手の方がいい。臓器を持ち去る理由は良くわかりませんが……」

ゼロはぼりぼりと頭を掻いた。

「まあ、直接聞いてみればいいでしょう」

「直接？」

アリスは啞然と聞き返す。ゼロはあつさり頷いた。

「貴方はたまに街に買い物に行くでしょう？　噂話には参加しないんですか？」

「時間の無駄だから……あんまり」

アリスは苦笑する。

「賢明な判断です。　なるほど、それで知らないんですね」

「……何か、噂があるんですか？」

「ええ」

ゼロはひょいと床から立ち上がり、アリスを見下ろした。

「『天使』が次に狙うのは『首つりの伯爵』だとね　」

x x x

それから数日後の夜、コヴェント・ガーデンの歌劇場にゼロ・ハングマン伯爵とその執事が現れた。彼が公の場に姿を見せたのは、実に数ヶ月ぶりのことだ。彼とすれ違う貴族らは、どこか怯えたよ

うな目をして会釈する　遠巻きにされるのはいつものことだとしても、今宵は格別ひどい。

「リデル」

背を丸めて歩いていたらゼロが、不意に背後のリデルを呼んだ。

「いかなさいましたか？」

「もしかして……私は疑われているのか？」

「さあ」

「私には『天使』なんて似合わないと思うんだが」

「私もそう思います」

「率直な意見がありがたいよ」

ゼロは肩をすくめて再び歩き始める。リデルは、その後ろ姿をやや心配そうに見守っていた。彼は知っていた　街で囁かれている「天使」にまつわる噂を。

「天使」は「首つりの伯爵」を狙っている。

今宵の演目は「ファウスト」。悪魔メフィストフェレスと契約を結んだファウストが純真無垢な少女、マルガレーテに恋慕し、やがて彼女は身を墮としてしまう　。

「ひどい話だな」

ゼロは小さな声でつぶやいた。リデルはその翡翠の目で静かにゼロを見る。

「歌劇にはないが、そもそもメフィストフェレスが神と賭けをしたのが事の起こりだろう。神が『賭け金』に選んだのがファウスト。その男の心を墮落させることができればメフィストフェレスの勝ち。ファウストやマルガレーテはやつらの被害者だよ。案外、彼らは本当にただ愛しあっていただけなのかもしれない。　いや、」

リデルは静かに主人の言葉に耳を傾けている。ゼロはふう、とため息をついた。

「メフィストフェレスさえ、神の手の内にあつたのか……」

確かにゼロの言う通りかもしれない、トリデルは思った。ファウストがマルガレーテを愛したこと、それそのものは罪ではないはずだ。彼が罪を犯したとするならばマルガレーテの兄を手に掛けたことと、神に叛いたこと。後者は本当に罪と言えるのだろうか……。

終盤。舞台ではファウストとの間に生まれた我が子を手に掛け、精神に異常をきたしたマルガレーテが天使に祈り続けている。ファウストは必死でそんな彼女に手を伸ばしているが、彼女には届かない。新進気鋭のソプラノだというそのマルガレーテは、やや技量に問題があるように思われた。何故、彼女がこの舞台に起用されたのだろう、トリデルは不思議に思った。

『私、貴方が怖い!!』

マルガレーテに拒絶されたファウストの絶叫、そして天使の合唱。終幕直前、舞台上にはひとりの天使役が。

「ん？」

ゼロがやや身動いだ。目を細めて舞台をじっと見つめる。リデルもつられて天使を見つめた。真っ白な服に身を包み、顔にまで白い仮面をかぶって。

「あ　?!」

叫んだのは誰だったろう。天使は手にしていた杖を、マルガレーテに降り下ろした。白い服に点々と飛ぶ赤。杖ではない。細身の剣だ。

女性たちのかん高い悲鳴が響き渡った。

リデルの頭が一瞬真っ白になった隙に、ゼロは座席から駆け出していた。

「ゼロ様!!」

あわてて後を追おうとするが、パニックに陥った観客に阻まれて移動がままならない。ゼロの後ろ姿はみるみるうちに遠ざかってい

く。リデルは叫んだ。

「ゼロ様　　！！」

x x x

コヴェントガーデンの路地を縫うように走り抜ける「天使」を追うのは、さほど難しいことではなかった。何しろ白い服は夜の闇でもひどく目立つ。ゼロは黒のフロックコートを靡かせてそれを追った。

霧のロンドン。視界が悪くなってきたな、と感じ始めた頃、「天使」は不意に立ち止まった。

「はじめまして、『首つりの伯爵』……」

ゼロは黙って「天使」を見つめる。月に照らされて燦然と輝くブリンド。顔は未だ仮面に隠されていた。

「何故、僕を追ってきたんですか？　　噂　　ご存知ありませんでした？」

「知っていますよ。貴方は私を狙っているそうですね？　　その理由は？」

静かなゼロの声に、「天使」は少しだけ笑った。

「貴方にならきつとわかってもらえと思うのですが……ねえ？」

『首つりの伯爵』

「……………」

ゼロは無表情に「天使」を見返した。

「貴方、死体を集めて何をしているんです？　　きつと切り刻んで悦に入っているんでしょう？　　どうです、興奮しますか？」

「いえ、別に」

「嘘をつくことはない。だって僕らは同類なんだから」

「天使」はそう言いながら一歩進み出た。靴に染みたマルガレー

テの血が、ぴちゃりと濡れた音を立てた。

「貴方は伯爵だから、死刑になった死体とか、殺人事件の被害者の死体とか、そういったものを裏から手に入れることができる。でも僕は違う。そんな力はない。だったら、どうしよう？ どうしますか？ 貴方なら」

ゼロが答える前に、彼は言葉を続けた。

「だって、仕方がないじゃないですか。死体がないことには満たされないんだから。そうでしょう？ 伯爵。僕らって、そういう人間でしょう？」

ゼロはうなずくこともなく、ただ彼を見つめている。彼は苛立たないように踵を鳴らした。

「とはいえ、善人を殺すんじゃない？ こっちの寝覚めも悪いんでね。できるだけひとに憎まれているような、そういう人間を探すんです。そうしたら。不思議なものだ、『天使』の仕業だなんて言われて、英雄視されちゃった」

「天使」は大笑した。

「いなくなった方がいい人間を殺して、何が悪い？ 何も悪くない。神様だって自分を裏切るものには死をもつて報いたじゃないか。僕が同じことをして、誰が責められます？」

「今日のあの彼女には何の罪が？」

「ああ、あれは僕の姉です。唯一の肉親なんですけどね」

「天使」はあっさりと言った。

「あいつ、あの役を体を使って勝ち取ったんですよ……。穢いでしょう？ 妻子ある相手もいたのにね！ 本当に穢い。あんな売女ばいたが僕の姉だなんて、ぞっとする」

「今回は臓器を取らなかつたんですね」

「今日は、姉よりも貴方のほうが重要だから。あれはいわば困んだ」

「天使」はゆらりと一步、彼に近づいた。

「呪われた血筋のハングマン家……貴方が最後の生き残りだもの、



貴方の血を見てみたいんですよ。母の腹を割き、父によって取り出された子供……ゼロ・ハングマン……」

「血？ 血くらいいくらでも見せてあげますよ」

突然、ゼロは自分の指の皮膚を食い破った。口の中に広がる血の匂い。「天使」ははっと息を飲んだ。その一瞬の隙で、ゼロには十分だった。

「ぷっ！！」

口に含んだ血液を、「天使」のかぶった仮面に向かって噴き散らす。「天使」が怯んだ。

「貴方の唯一の肉親は姉。それももう、いない」

ゼロはつぶやきながら、懷からコルトSAAを取り出した。「天使」の胸に向けて、撃つ。

ぱん！

「貴方が死んでも、いなくなっても誰も困らない 何も悪くない なるほど、貴方の理屈では私は貴方を殺しても問題ないということですね」

ゼロは地面に崩れ落ちた「天使」の髪を掴みあげた。

「頭を避けたのは……貴方の頭の中身に、脳に興味があるからですよ」

仮面を外し、瞼を押し広げる。サファイヤのようなそれは、既に瞳孔が散大して空虚だった。

「私は殺人は嫌いです でも、殺される方がもつと嫌いです」

幼い彼を殺そうとした祖母と、彼を救った若き日のリデル。ゼロは思い出すとなしにそれを思い出した。確かに、父は母の腹を割いて彼を生み出した。それは、母が病で彼を生み落とす力がなかったから。我が子だけはどうか、生きて 母の望みだった。しかしその両親の行動は祖母にとって許しがたい悪であり、その憎しみは、ゼロに向けられた。その頃には、既に父は愛する妻のあとを追っていたから……。

「貴方のお姉さんは、貴方のために身を売ったのかもしれないのに。

唯一の肉親として、貴方を養うために　そのために、望まぬことをしたのかもしれないのに」

ゼロはつぶやく。

「ゼロ様！」

背後から駆け寄ってくる足音が聞こえた。ゼロは慌てる様子もなく手を払って立ち上がる。ゆっくりと振り向くゼロの目の前で、リデルが息を切らせていた。

「ゼロ様……、ご無事で」

「リデル」

ゼロは手にしたままだったコルトSAAをコートのポケットに仕舞い込み、「天使」と呼ばれた青年の死体を見下ろした。

「この『天使』を、城に運んでくれ」

「……御意」

リデルは恭しくそう答え、そして付け加えた。

「しばらく貴方のおやつは抜きです。全部アリスにあげます」

「えっ?!」

ゼロは弾かれたようにリデルを見つめる。リデルは死体を担ぎ上げながら、すらすらと続けた。

「勝手な行動をして、私に心配を掛けた罰です。お分かりですね？アリスは働き者で良い子ですし、今日もお留守番をしてくれました。ご褒美をあげなくては」

「し……しかし……」

当惑した顔でリデルを見上げるゼロに、彼は真顔で告げた。

「ゼロ様。もうこのようなことは　」

「……わかった」

ゼロは素直に頷き、そしてぽつりとつぶやいた。

「殺人は、嫌いなんだがな」

「天使なんて代物がいるのなら、私は見てみたいですね。特に羽の辺りの構造が」

先日、アリスに向かって言ったことを思い出す。だが、今リデルに運ばれている「天使」には羽がない。

「このことを知られたら、きつとアリスに嫌われてしまいますねえ」

ゼロはのんびりと、しかし真剣な眼差しでそうつぶやいた。

× × ×

「天使、消えてしまったそうですね」

アリスの言葉に、ゼロはカップを持つ手を止めた。

いつもはティーセットとともにあるはずのお菓子がない。代わりにビスキュイを頬張っているのはアリスだった。

「もうずっと『裁き』 えっと、つまり殺人がないって」

「そうですね」

ゼロは再びカップを傾ける。アリスは首を傾げてゼロを見つめた。

「ゼロ様」

「何です？」

「『天使』 どこに行っちゃったんでしょうね」

「さあ」

短く答え、ゼロは天井を見上げる。

「天国にでも帰ったんじゃないですか」

「それ、死んだってことですよね？」

「ええ……まあ」

歌劇「ファウスト」ではマルガレーテは天使に迎えられ、天国への扉をくぐる。つまり 彼女は死んだ。そういうことだ。

それを天使は称して言う 「救われた」と。

「でも、何だかほっとしました」

アリスは微笑む。

「ゼロ様が変なこと言ってたし……」

「変なこと？」

首を傾げるゼロに、アリスは頷いた。

「ええ。ほら、『天使』が次に狙うのは……』ってやつです」

「ああ」

「ゼロ様が殺されてしまつては、困りますもの」

「困りますか」

「もちろん。だって、」

ゼロの問いに、アリスは大きく頷いた。

「私、次の仕事探さなきゃいけなくなります」

「ええ、ええ、そうでしょうとも」

アリスが手に持つビスキュイを恨めしそうに眺めながら、ゼロはつぶやいた。アリスは小さく吹き出す。

「嘘ですよ。……私、このお城で働くの、気に入っているんです」

「……………」

ゼロは一瞬絶句した後、やがて微笑んだ。

「そうですか……」

マルガレーテがあのととき、ファウストの手を取っていたらどうなっていただろう。天国には行けなかったかもしれないし、死後はメフィストフェレスに魂を奪われたかもしれない。それでも、生きている間は案外としあわせに過ごせたのではないだろうか……。それでもやはり悪魔は悪魔だと、悪魔に魂を売るくらいなら死んだ方がましだと、ひとはそう言うのだろうか。

「ねえ、アリス」

ゼロは飲み干したカップをソーサーの上に置いた。

「天使は……、いえ、天使も、案外と人とそうかわりないかもしれないかも  
ませんよ」

「え？」

「いえ。何でもありません」

「天使」の頭蓋に包まれていた灰色の脳。そこには何の徴も刻まれてい  
なかった。いや、体中どこを探しても、罪の証はどこにもな  
かった。悪は、見当たらなかった。

「私が死んだら……誰かそれを探してくれるでしょうか」  
ゼロはつぶやく。

どうか、この身に重ねた罪が残っていますように。父の罪も、母  
の罪も、リデルの罪も、己の罪も、すべてが刻み込まれていますよ  
うに。

私は、それを何よりも愛しているのだから。

## ホーンテッド・メイデン

アリス・ウェーバーがジュリエット・ノーマンと再会したのは、  
買い物に出た街の中だった。

「アリス？」

呼び掛けられて振り返り、驚いて声を上げる。

「もしかして、ジュリー？」

「ええ、私よ」

アリスを呼び止めたのは短い金髪の、まるで少年のようななりをした少女だった。年はアリスと同じくらいだろう。アリスは少女に駆け寄り、懐かしげに目を細めた。ジュリエットとは同じ孤児院の出だが、彼女に会うのはアリスが一年前にそこを離れて以来である。

「見違えたわ。髪、切ったのね？」

「ええ」

ジュリエットは笑った。

「今のお屋敷に勤める前に、切って欲しいと言われたの」

ジュリエットの言葉に、アリスは自分の勤める城を思った。無表情で、無愛想で、風変わりな主人の顔。だが、髪を切られることはない。

ジュリエットは風に頬を撫でられ、心地よさげに目を細めた。

「久しぶりに外に出られて、嬉しい……」

「厳しいお屋敷なの？」

「厳しいというか……でも、お給料はいいのよ」

ジュリエットは肩をすくめる。

「ある程度貯まったらやめるつもり。あとちょっとの我慢だから」

「そう……」

ちらりとアリスの胸に疑念がよぎった。ジュリエットは何の仕事をしているのだろう。多分、自分のようなただのメイドではない。髪を男の子のように短くしなければならず、めったに外に出られない

いとは ふつうではない、と思った。だからこそ給料が高いのだ。  
ジュリエットは広場の時計に視線を投げ、小さく声を上げた。  
「もう戻らないと……。じゃあ私、行くわね」

「ええ……元気で、ね」

ジュリエットはにこりと微笑んで、ひらひらとアリスに手を振る。  
アリスは漠然とした不安を胸に、遠ざかる後ろ姿を見送った。

x x x

「使用人に髪を切らせる？」

アリスの話を聞いたハングマン城の主 ゼロ・ハングマン伯爵  
は積みあげていたカードから目を上げ、ぎょろりとした黒目で彼女  
を見つめた。

「変わった趣味の主人ですね」

トランプタワーの作成に興じるのも変わった趣味ではないのだろ  
うかと思いつつ、アリスは紅茶を給仕する。ゼロは湯気のたつカッ  
プに口を付けた。

「長い髪がスープに入っていて、嫌な思いをしたことでもあるんで  
しょうか」

「そうかもしれませんが……」

「何か、気に掛かることが？」

ゼロに尋ねられ、アリスは困ったように笑った。何となくジュリ  
エットが心配だ、などと言える訳もない。

「いえ、何でも」

「そうですか」

ゼロは完成したトランプタワーを眺めていたが、やがて最下段を  
ぴんと指で弾いた。

「あっ」

思わず声を上げるアリスの目の前で、タワーはばらばらに崩れ去る。床に散らばったカードには目もくれず、ゼロはスコーンをかじった。

「せつかく作られたのに」

アリスが言くと、ゼロは軽く肩をすくめる。

「いつまでも積み上げておく訳にはいかないでしょう？　いつかは崩さないと」

「でも……」

アリスは静かに言った。

「片付けるまで、お茶のお代わりは入れませんよ？」

「え？」

ゼロがぎくりとしたようにアリスを見た。アリスはことさらに微笑みを浮かべる。

「リデルさんに言われているんです。ゼロさまにあまり部屋を散らかさせないようにって」

「リデルが……」

長く勤める執事の名を出すと、ゼロはやや怯んだようだった。

「とにかく、先に片付けましょう。私も手伝いますから」

「……………」

しばらくぼりぼりと頭を掻いていたゼロだが、やがてため息をついて立ち上がった。

「わかりました。片付けます」

「分かっていただけで嬉しいです」

「ところで……」

床にしゃがみこんだゼロが、尋ねた。

「貴女も、お金が貯まればここをやめるのですか？」

「え？」

意外な問いに、アリスは思わず聞き返す。

「いえ。何でもありません」

ゼロはそれ以上聞こうとはせず、ただカードを拾うことに熱中し



ているようだった。

× × ×

アリスがジュリエットと出会ってから十日後。ゼロがのそりとアリスの部屋を訪れた。

「アリス。この前街で会ったお友達ですが」

床に座り込もうとする彼に、アリスは慌てて椅子を用意する。だが、結局ゼロはするずると壁に背中をつけて床の上に腰を下ろした。「特徴を覚えていたきたいのです。髪は短いということでしたけど、年齢は貴方と同じくらいですか？」

「え、ええ」

アリスは頷く。

「金髪で……えっと、目は濃げ茶色、だったかな？ 背は私より少し高いくらいで」

「髪の短さはどれくらいです？」

「どれくらいって……」

口ごもるアリスに、ゼロは重ねて問い掛けた。

「私やリデルと比べると、どうですか？」

リデルはプラチナブロンドの短髪、ゼロは無精なせいで目や首筋を覆う程度には伸びた黒髪だ。アリスはうつん、と唸った。

「リデルさんよりは長いけど、ゼロ様よりは少し短いくらい……だったと思いますけど」

それがどうかしたんですか、と問う前に、ゼロは床から立ち上がっていた。

「ありがとうございます。失礼しました」

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

背を向けて出て行くこうとするゼロの腕を、とっさに掴む。彼は小

さく肩を揺らし、立ち止まった。

「ジュリー……ジュリエットがどうかしたんですか？ どうしていきなり彼女のことを……」

「……………」

ゼロの横顔を覗き込むと、彼は困ったように眉をわずかに寄せていた。薄い唇を小さく開け、何か言い澀んでいるようにも見える。

「ゼロ様……？」

「……落ち着いて聞いて下さい」

ゼロの大きく広がった闇のような瞳が、アリスを映した。彼女は小さく頷く。

「今朝、ひとつの死体が城に運び込まれました。普通では考えられないほど短い髪の、若い女性でした。身元は不明だそうです」

「……え？」

ゼロを掴むアリスの手が、細かく震え出した。

「ま、まさか……」

「はい。貴方に聞いたジュリエットさんの特徴と、一致します」

「……………」

「死因は不明だそうですので、少し調べてみましょう」

言葉を切り、ゼロはアリスをじっと見つめる。

「大丈夫ですか？ 気分が悪いならリデルを呼びますが……」

「い、いいえ……」

強張った唇を無理やりに動かし、アリスは言う。      ジュリエッ

トが、死んだ……？      その意味が、わからない。

「大丈夫、です」

「無理はしないで下さい。仕事は明日に回してもらっても構いませんから」

相変わらずの淡々とした調子でゼロは言い、やがて彼女の手を取って自分の腕から引き剥がした。立ち尽くすアリスの目の前で、音を立てて扉が閉まる。

「ジュリー……」

やがて、彼女はへたり込むようにベッドに腰掛けた。体がぶるぶると震えている。凍えそうな全身の中で、彼女に触れたゼロの手の感触だけが温かった。

ロンドン郊外に佇むハングマン城、通称「首つりの城」に住まうのはゼロ・ハングマン伯爵とその執事リデル、そしてメイドであるアリス・ウェーバーの三人である。それ以外にひとを雇っていないのはハングマン家が没落しているからではなく、城がその通称が示すとおりの怪談じみた噂に付きまとわれているためだった。アリスはそのほとんどが根も葉もないものだと思っている。だが、その噂の中にはひとつだけ真実があった。曰く「首つりの城」には死体が集まる。

死体なら何でも、というわけではない。病死や明らかな事故死であれば、そのまま遺族の手によって埋葬される。ただし、身元や死因のわからないいわゆる「変死体」が発見された場合、ロンドン警察を通じて秘密裏にリデルの元へと連絡が届く。すると彼は馬車を駆り、死体を引き取りに向かうのである。引き取られた死体は城の地下でゼロの手により「解剖」される。何故伯爵である彼がわざわざそのような忌まわしい行為に手を染めるのか　アリスはその理由を知らない。ゼロがアリスに解剖に関する話をすることはほとんどなかったし、そもそもいつ彼が地下に向かっているのか、それすらもアリスは知らないし、知らない方が良いことだと思っていた。多分、ゼロもそう思っているのだろう。

だが、今回ばかりはそういうわけにはいかない。今朝の死体がジュリエットならば、アリスは彼女が何故死んだのかを知りたい。病気が、事故か、それとも殺されたのか。

ゼロがアリスの部屋を訪れてから数時間後、彼女は彼の書斎に向かった。木製の扉に向かい、ノックする。

「はい？」

「アリスです。少しお話したくて……」

わずかな時間を置いて、扉は開けられた。ゼロの髪は濡れている。シャワーを浴びたのだろう、とアリスは思った。つまり、解剖はもう終わったということだ……。

「先ほどは驚かせてしまつてすみませんでした」

彼女をソファに座らせ、ゼロは落ち着きなく部屋を歩き回る。

「貴方のいた孤児院に連絡を取りました。どうやら、死体の身元はジュリエット・ノーマンで間違いがないようです」

「……そう、ですか……」

アリスは目を閉じ、膝の上でぎゅっと手を握りしめた。ジュリー、何故……？

「死因が、気になりますか？」

「……はい」

「彼女に外傷はありませんでしたので警察は病死か何かかと思ったそうです。しかし、髪の短い若い女性の死体に見覚えのあった古参の警察官が、こちらに連絡を取ってくれました」

「……どういふことですか？」

「数年前から、半年に一度程度の割合で同じような死体が見つかつていたようです。今まではずっと自然死として扱われていたそうですか……」

ゼロはとつとつと語った。

「死体の身元も不明で、該当するような者の捜索願いも出てこないですから、警察も深く追求はして来なかったと」

「結局、ジュリーはどうして……？」

死んでしまったのか。その言葉が出ずに、アリスは俯いた。

「結論から言うと、他殺です」

ゼロはぼつりと言った。アリスは息を飲む。

「右の鼓膜に小さな穴が開き、そこから傷が脳に達していました。それが死因です」

「……え？」

「つまり 耳の奥には脳があるんです。しかも、かなり重要な機能を持つ部分だ。耳を通じて、そこを破壊した。一見、外傷は残りません」

「……だ、誰が、そんな」

唇が震える。頭に血が上った。何故、ジュリーが殺されなければならなかったのだらう。悲しいのか、悔しいのか、それとも怒っているのか。自分の中を渦巻く感情に、上手く名前が付けられない。

「それは、もうすぐわかると思います」

「え……？」

思いのほか近い場所で聞こえたゼロの静かな声に、アリスは顔をあげる。目の前に立っているゼロは、アリスの髪をさわさわと撫でていた。アリスが気付くと、ゼロは慌てて手を引く。シャツの袖に指先まで隠れていて、どうやら彼は袖越しに彼女に触れていたらしい。

「すみません」

何故ゼロが謝るのか、アリスには良くわからなかった。彼が背を向けると同時に、扉がノックされる。

「入れ」

相手がわかつているからだろう、ゼロはすぐにそう言った。

アリスには必要なほど礼儀正しいゼロだが、そういえばリデルに対してはかなりくだけた言葉遣いで接している。私にもそうしてくれればいいのに、とアリスは思った。

「失礼します」

部屋に足を踏み入れたりリデルはアリスの姿を見て少し驚いたようだったが、すぐにゼロの元へと歩み寄った。

「この一ヶ月間に出た、求人新聞広告です」

差し出された紙数枚を受け取り、ゼロは次々に目を走らせていく。

やがて、視線が一箇所に止まった。

「……なるほど」

ゼロは紙をはらりと床の上に落とす。ソファに座り込んだままの

アリスへと振り返り、ゼロは言った。

「今日はもうお休みなさい」

「で、でも」

「命令ですよ、アリス」

「……はい」

俯いた彼女の髪に、再びさりとしたものが触れた。また、袖だろうか。何故、直接触れようとはしないのだろう。触れたくはないからだろうか。アリスは顔をあげ、そつとゼロのシャツの袖をめくりあげた。

「アリス？」

「……」

あらわになつた彼の骨ばった手が、宙をさまよう。

「袖が長いと、汚してしまいますから」

アリスは弱々しく微笑み、立ち上がった。

「お邪魔しました」

視界にリデルの苦笑を捕えながら、アリスはゼロの書斎を後にした。

x x x

「ゼルダ・ウェーバーと申します」

ヘンリー・エヴァンズ卿の求人広告に応じて現れたその少女は、ひどく風変わりな雰囲気をもっていた。大きな黒目がちの瞳に、鮮やかな金髪。だが、華奢な骨格と短く切られた髪はヘンリーを満足させた。

「身寄りはいない、ということだったね？」

「はい、孤児ですから」

まるでささやくような、小さな声。控えめで大人しい少女なのだ

ろうと思った。その割に身長は高いから、今までのように背の高いブーツを履かせる必要もなさそうだ。

「君には病気の妻、マリアンヌの世話をしてもらいたい」

ヘンリーはゆっくりと言った。

「妻は夜しか起きられないから、その時に食事と身の回りの世話を」

「はい」

「妻は女が嫌いなんだ。申し訳ないが、男の服を着てくれ。服はこちらで用意する」

「はい」

「病気のせいで時々妙なことを口走るかもしれないが、気にしないでもらいたい」

「はい」

「妻の名誉のために、彼女の病気は秘密にしている。だが、ふと口が滑ることもあるだろう。すまないが、外には出掛けないようにしてくれ」

「はい」

「言いつけを守ってさえもらえれば、十分な給料は支払う。できるだけ長く勤めてもらえることを願っているよ」

「はい」

「……何か質問は？」

ゼルダはゆるく首を横に振った。ヘンリーは少し怪訝に思う。今まで彼が雇った少女たちは、あれやこれやと質問を重ね、そのたびに彼は四苦八苦しなながら答えを返した。だが、ゼルダは何も聞くとはしない。これは長く勤めてくれそうだとヘンリーはほっとした。この前に雇った少女も良く働いてくれたが、急に辞めたいなどと言い出して彼を困らせた。この屋敷のように条件の多い場所では、求人広告を出してもなかなか次が見つからないのだ。結局三日ほど穴を開けてしまったが、こうして見つかったのだから良しとしよう。ヘンリーはゼルダを連れて離れの塔の、彼女に割り当てた部屋へと向かった。

「ではここで待っている。着替え終わったら妻に紹介しよう」

「はい」

閉じた扉の前で、ヘンリーは小さくため息をついた。妻のいるこの塔に入ることができるのは彼と妻の世話をする男装の少女だけで、他の使用人にはここに来ることを許していない。以前の少女がいなくなつてから三日間、妻の具合は悪かったが、新しい少女が来たことで少しは落ち着くだろうか。

カチャリ、とノブが回つて扉が開いた。ゼルダが仕立ての良い少年の服を着て立っている。その姿は驚くほど様になっていた。これなら妻も満足するだろう、とヘンリーは思った。

「では行こうか」

ふたりは階段を上り、やがて鍵のついた扉が姿を現した。ヘンリーは胸ポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込む。そつと、音を立てないように鍵をひねつた。

「さつき言つたことを忘れずに。……さあ、入りたまえ」

鍵を仕舞い込んだヘンリーは、ゼルダを伴つて薄暗い部屋の中に入った。

「誰？」

細い声が、空気を割いた。ヘンリーはゼルダの背中をぐいと押す。妻が息を飲む気配がした。

「リチャード……？」

何も応えるな、と。ヘンリーはゼルダに小声で囁いた。彼女は病氣なのだ。正気ではない。彼女は金髪の少年を求め続けているのだ。今は亡き兄を　幸せだつた幼い頃の幻影を　。

彼の感傷を破るように、ゼルダの靴が固い床の上で音を立てた。

「久しぶりですね、マリアンヌ」

「？！」

ヘンリーはゼルダの腕を掴もうとして、失敗した。彼女はつかつ



かとベッドに伏している妻の側に近付いていく。

「ゼルダッ?!」

「あなた……だれ?」

ヘンリーと彼の妻は同時に声をあげた。ゼルダはちらりとヘンリーに視線を投げた後、己の髪を掴む。

「あつ?!」

床の上に落ちたのは、金髪のかつらだった。その下から現れたのは、漆黒の髪。ヘンリーは叫んだ。

「お前は……?!」

「ゼロ……? ゼロなの?」

「そうですよ、マリアンヌ」

彼に背を向け、薄闇の中に佇んでいる少女 いや、男。彼のまとう不吉な空気に、ヘンリーは身震いした。数々の噂が語られている「首つりの伯爵」、その二つ名は伊達ではないのだ……!

「リチャードが亡くなったのは知っていましたが、まさか貴方がこのようなところに閉じ込められているとは……」

「『リチャードが、亡くなった』……?」

鸚鵡返しにつぶやく妻の声に、ヘンリーは舌打ちをした。

「何のつもりだ、ゼロ・ハングマン!! 何故貴様がここにいます?」

「貴方に聞きたいことがあるのですよ、ヘンリー・エヴァンズ」

ゼロはゆっくりと首を巡らせ、その暗い瞳でヘンリーを見つめた。

「ジュリエット・ノーマン。その名前に聞き覚えは?」

「し……知らん!」

「おや、そうですか。先日うちのメイドが彼女と街で出会いましたね。このお屋敷のことを喋っていたそうなのですが……」

ヘンリーはかっとしてまくし立てた。

「そんなはずはない! 彼女にはうちのことは他言しないように言い聞かせて」

「『彼女』、ね」

ゼロのつぶやきに、ヘンリーは口をつぐんだ。自分の失言に気付くと同時に、手にしたステッキを握り直す。掌にじっとりと汗がにじんでいた。

「しかし名を偽って忍び込むとは、伯爵様が随分とえげつない真似をしてくれるじゃないか」

ヘンリーは笑おうとして失敗し、唇の端を引きつらせる。

「うちの妻に何の用だ？ 何か汚らわしい目的でも？」

「まさか」

ゼロはポケットに両手をつ込み、首を左右に振った。

「ただ、うちのメイドに聞かれたのでね 『何故、ジュリーは死んでしまったのか』と。その答えを、探しに来たのです」

そんなことで、この男は。ヘンリーはぎりと奥歯を噛みしめた。

「結局、貴方は心を病んだ奥方のために彼女の兄の代わりを用意していたというわけですか。しかし、女性だったのは……」

「男とふたりにするわけにはいかないだろうが。それに、彼女は幼い頃の兄の面影を求めていた」

何とか心を落ち着かせようと努力しながら、ヘンリーは言った。

とにかくこの伯爵をどうにかしなければならぬ。今ならまだ間に合う。妻が自分に気付いてしまう前に……どうにかして……。

「なるほど。しかし、何故少女らを殺したのですか？ エヴァンズ卿」

「……………」

ヘンリーはもはや答えなかった。ステッキを構え、一歩進み出す。視線の先で、ゼロは嘆息したようだった。

「耳の奥が脳であることを熟知するほどの知性を持ちながら、随分短絡的な行動を取るんですね」

うるさい。

「そんなに奥方の病気を秘密にしておきたかったのですか？」  
うるさい。

「最初から身寄りのないものを選んでいたのも、殺した後に発覚しにくいようにですね？」

うるさいうるさいうるさい！！

ヘンリーはステッキを振り上げ　そのままぴたりと静止した。彼の胸元にはコルトSAAが突きつけられている。

「ステッキを捨てて下さい、エヴァンス卿」

ゼロの静かな声に従い、ヘンリーはステッキから手を離す。床に落ちたそれは、驚くほど大きな音を立てた。

「結構です。　それでは私の質問に答えて下さい」

「……お前の、言った通りだ」

ヘンリーは低い声でつぶやいた。

「妻を守るため　口さない者たちからの誹謗中傷から守るため、仕方がなかったのだ」

「そのために、幼い頃の兄のレプリカを与え　用済みになったものは壊したと？」

「そうだ」

ヘンリーの口の中はからからになっていた。

「仕方がなかったんだ……他に、方法が……私は、妻のために……」

「嘘つきー!!」

その叫び声と同時に、銃声が響き渡った。

「……え？」

ヘンリーは胸に手をあてる　熱いものが彼の指を濡らした。痛い。痛い。痛い。

「嘘つき。貴方は、嘘つきよ」

「マリアンヌ……」

ゼロは茫然とつぶやく。彼の手には握っていたはずのコルトSAA

Aがない。背後から突然ひつたくられたのだ。

「ヘンリー。貴方は、嘘つきだわ」

ヘンリーを撃ったのは、マリアンヌだった。長い金髪は乱れ、白い肌は薄汚れている。その中で、褐色の瞳だけが燃えるような色を放っていた。

「マリ……ア……」

ヘンリーはがくりと膝をつく。その頭を、マリアンヌは険しい表情で見下ろした。

「財産目当てで私に近付き、兄を殺したくせに！ 私を病気扱いして閉じ込めて……私は病気なんかじゃないわ！！」

「違う……」

ヘンリーは手を伸ばした。恋焦がれて止まなかった。それでいて届くことのなかった、最愛の妻に。

「マリアンヌ……私は、お前を……愛……」

「うるさい！！ これ以上私を騙さないで！！」

再び、絶叫と銃声。ゼロは思わず眉をひそめた。マリアンヌの放った銃弾はヘンリーの頭を貫き、床に大きな血溜まりを作る。

「ゼロ」

マリアンヌは銃を手にしたまま、ゆらりとゼロに向き直った。

「貴方に、お願いがあるの……」

「何です？」

警戒をにじませる彼の目の前で、マリアンヌは花のように微笑んだ。その表情はゼロが幼い頃に会ったマリアンヌ、そのままで

った。兄、チャールズに連れられて、マリアンヌはいつでももしあわせそくに笑っていた。両親に愛され、兄に可愛がられ　ゼロには永遠に手に入らないものを持っている彼女が、ひどくまぶしかった……。

「私を……お兄様の横に埋めて……」

「……………」

ゼロの目の前で　彼女はこめかみに銃口をあて、引き金を引い

た。

× × ×

馬車はハングマンの城に向かい、走っている。ゼロは小さくつぶやいた。

「どちらが本当なのだろう」

ヘンリーはマリアンヌが病気なのと言った。彼女を守るために兄の幻を見せ、そして噂が広がるのを避けるために少女たちを殺したのだと。

マリアンヌはヘンリーが兄を殺したと言った。自分は病気などではないと。ヘンリーは自分を騙しているのだと。

「どちらが本当なのだろう」

マリアンヌは病気だったのか。ヘンリーはチャールズを殺したのか。ヘンリーはマリアンヌを愛していたのか、それとも財産目当てだったのか。ふたりのどちらが真実を語っていたのか、どちらが嘘をついていたのか、それともふたりとも真実を語り、ふたりとも嘘をついていたのか。もはや永遠にわからない。

馬車をリデルの駆るに任せ、ゼロは目を閉じた。その懐には、三発の銃弾を失ったコルトSAAが眠っている。

× × ×

エヴァンス邸で起きた奇妙な事件は、しばらく世間を賑わせていた。エヴァンス卿とその奥方が一晩のうちに亡くなり、しかもその奥方が塔に閉じ込められていたことが明らかになったのである。状

況から見てエヴァンズ卿は他殺、奥方は自殺と考えられた。しかし彼らの命を奪ったはずの銃がどこにも見当たらず、それは今後暫くの間、ひどく警察を悩ませることになる。

あの夜起きたことを正確に知っているのは、ゼロとリデル、そしてアリスの三人のみである。それでも全てが明らかになったというわけではなかった。

「真実は、わかりません」

アリスの入れた紅茶を飲みながら、ゼロは静かに言った。チャールズの死因は落馬であり、事故として処理されていた。だが本当に事故なのか。他殺と考えられる余地はないのか。数年前の事件であり、今となっては明らかにすることはできない。

「私にはどちらともつかない……」

「どちらでもいいです」

アリスは顔を伏せ、小さくつぶやいた。

「だって、どちらにしても……ジュリーは帰って来ませんから」

「……」

ゼロはカップをテーブルに置き、ちらりとアリスを見上げた。

「……貴方の言う通りですね」

「ごそそとシャツの袖を伸ばすゼロを、アリスがとどめた。」

「アリス？」

「袖が汚れちゃいますってば」

「……でも」

ゼロは顔を背け、ぼそりと言った。

「私の手は、血なまぐさいかもしれせんよ」

「……」

アリスは膝を折ってしゃがみこみ、ゼロの手に顔を寄せた。

「アリス？」

「アップルパイの匂いがあります」

アリスは顔を上げ、微笑んだ。

「今日のおやつはアップルパイだったんですね」

「……え、ええ」

ゼロは自分の手をもちあげ、鼻に近づけてみた。確かに、焼いたリンゴ独特の甘い匂いが漂ってくる。

「では……髪を触っても構いませんか？」

おそろおそろ尋ねたゼロに、アリスはうなずいた。ゼロはそつと手を伸ばし、アリスの髪に触れる。

「……孤児院でも悲しいことがあると、頭を撫でてもらいました」

アリスは床に座り込み、視線を落とす。そこには、ジュリーもいた……。

「だから何だか……懐かしい」

「……………」

ゼロはふと手を止めた。

「アリス。私も撫でて下さい」

「え？」

アリスは驚いて顔を上げた。

「私は頭を撫でられたことはありません。ですから、撫でて下さい」

「えーっと……」

「さあ」

「あの……」

「さあ」

ずいとい黒い頭を寄せられて、アリスは躊躇いながらもそれにぼんと手を載せた。ゼロのくせつ毛が指の間に入り込んでくる。

「……なるほど」

アリスに頭を撫でられながら、ゼロは小さくつぶやいた。

「それでマリアンヌは、あんな風に笑っていたのですか……」

幼い日の彼女は、チャールズに頭を撫でられながら嬉しそうに笑っていた。それはこの心地良い感触のためだったのか。

「また、撫でてもらえるといいですね」

隣り合わせに眠る兄妹に想いを馳せながら、ゼロは目を閉じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9260z/>

---

HANGMAN

2011年12月28日23時46分発行